

2024 年度 入学試験問題

国 語

(第 1 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「アニミズム」という言葉を聞いたことがありますか。イギリスの民族学者タイラーが一八七一年に、原始宗教の特色を表す言葉として、はじめて用いました。^① すべてのはアニマ（魂）^{たましい}を持つている、という考え方で、文明の発達していない民族特有のものだとされてきたのです。したがって、現代では通用しない古い時代の遅れた精神状態だと決めつけられて、評判が悪かったものです。なにしろ、動物や植物はもちろんのこと、石や水や土や道具などにも、そして自然現象にも命や魂や心があり、人間と話をしたり、精神的な交流ができるとする感覚ですから。

ところが最近では「アニミズム」が見直されてきています。それは^②自然に対して、現代の主流である理知的な、科学的な見方ではない、深い見方として、再評価されているのです。また、アニミズムは決して文明が遅れている状態ではなく、現代人である私たちも身につけている人間らしさの現れだと考えられています。

たとえば、きれいな花が咲いているのを見たら「ラッキー」と叫んだり、蠅が顔の周りを飛び始めたら、「あっちへ行け」と追い払ったり、まるで生きもの同士が会話している雰囲気です。そもそも花を摘んで飾ったり、鉢植えの花を育てるのも、花と目を合わせるのを楽しんだり、花に挨拶することもあるぐらいですから、アニミズムだと言えるかもしれません。ペットを飼っている人は、飼っているというよりも家族の一員として一緒に暮らしているという気持ちではないでしょうか。これもアニミズムでしょう。

つまり「アニミズム」という西洋由来のカタカナ言葉を使うから、何か特別な感覚のように感じますが、これまで説明してきたように、「生きもの同士」という感覚です。これは日本人だけでなく、人間なら誰でも持ち合わせているものなのです。百姓の「稲の声が聞こえるようになれ」という教えも、日本人の伝統的な天地有情の自然観なのです。

生きものに限らず、山も水も土も生きていただけではなく、魂（精神）を持っているという感覚は農業が狩猟採集の時代から引き継ぎ、さらに深めて来たものではないでしょうか。そこで私はアニミズムを「万物有魂観」と訳しています。

ところが現代では生きものの生や命まで、科学的に解析し、操作できるといふ考え方が強くなっています。蛙を見て「わっ、かわいい」と言うよりも、「それはトノサマガエルで、絶滅危惧種IB類です」と言う方が科学的かもしれません。これでは生きものと情が通わなくなっていくでしょう。このことへの反省から、かつて生きものだけでなく、天地自然の諸々と話をしていた時代の感覚・感性が見直されて来ているのです。

「草木も生きています」と言えば、反対する人はいないでしょう。ところが「草にも命がある」と言うとき、違和感を感じる人が増えてきます。さらに「草木には魂が宿っている」と言えば、多く

の人が眉をひそめ「それは宗教的な見方ですね」と反応します。

ここには(1)生、(2)生命・いのち、(3)魂・霊性、の三層があることがわかります。もとは一つだったものが、現代社会では三層に分かれてしまった、と言ってもいいでしょう。草木が芽生え、葉を伸ばし、花を咲かせ、実を稔らせるのは、「生」そのものです。しかし、その生の根源には、その生を生まれさせ、支え、終わらせ、そして再生させる何かがあるはずだと感じ、そう思う時にそれを「いのち」と命名したのです。さらにその「いのち」は、生ときも、生を失った後も存在し続ける、もつとたしかな、それでいて姿はつきりしないものの力で貫かれていくような気がするとき、その存在を「たましい」(霊性)と呼んだのです。

ただ近年気になるのは、「生命」が科学的に説明できるものとして、「いのち」から分離していることです。まるで「いのち」から[A]を抜き取ったものが、「生命」であるかのような説明を科学がしがちなのは、薄っぺらな思想ではないでしょうか。

「いのち」や「たましい」のない生きものは、生きものではなかったのです。お玉杓子の死骸を前にして、そこにはもうお玉杓子の「生」も「いのち」もありませんが、済まなかったと詫びて声をかける時、お玉杓子の「B」はそこにまだ存在しているような気がします。「生」と「いのち」の名残として、そこで私の詫びを聞いているという気がするのです。

(中略)

「稲の声が聞こえるようになれ」という百姓の教えも、擬人法と言うよりは、アニミズムと言った方がいいかもしれません。稲の表情から、稲が何を求めているかを読み取るというのなら、やはり人間の能力で読み取りますから、人間が主役です。科学的に観察したり、分析したりして、稲の状態を知ることあまり変わりません。そうではなく、稲が出している声が、聞こえてくるのですから、稲が主役で、百姓は受け身です。

つまり「声を聞いてやろう」と思っているうちは、人間が主体ですから、稲の声は聞こえないでしょう。むしろ受け身になって、稲の声に耳に傾けているときに、稲の方から声があるので、そういう感じになるのです。もちろんその声は、自分の身体の中で、人間の声に翻訳されます。

稲の葉が、虫(コブノメイ蛾や稲苞虫など)に食べられているのを目にすると、悲鳴が聞こえるのです。日照りが続いて水が極端に少なくなると、田んぼの中でも特に乾いた部分の稲は葉が巻き始めます。じっと耐えているように感じるので、もちろん、爽やかな夏の風にそよいで、葉が複雑な模様を描いているときは、まるで踊っているように見えます。風の音を、稲が歌っているように聞こえる時があります。

それにしても年寄りはず「稲の声が聞こえるようになれ」と私に言ったのでしょうか。たぶん、人間がえらそうに技術を行使するのではなく、稲を主役に立たせて、人間は受け身になって耳を傾けなさい。そうするなら、稲という生きものもつと深いところまで感じることができるよ。③そういう境地になるなら、田んぼのことも水のこと、そして天地のこともわかるようになるよ、と教えてくれようとしたのではないのでしょうか。それなのに、若かった私は心の中で

「何と」C 科学的で、時代遅れの発想だ」と思ったのでした。つくづく反省しています。

面白い実験があります。米の食味テストで、あまり味に差のないごはんを二つ用意します。一方はその百姓の田んぼで穫れた米です。それを明かして食べてもらうと、ほとんどの百姓がわが家の米の方がおいしいと答えます。ところが、次に目隠しして、どちらがわが家の米かわからないようにして食べてもらうと、わが家の米がおいしいという比率は50%に近づきます。これは何を物語っているのでしょうか。

人間はごはんに限らず食べものを舌だけで味わっているわけではありません。わが家の米を食べるときには、田んぼに通ってその稲の手入れをした記憶が甦ります。田んぼの風景が目の前に広がり、夏の涼しい風が思い出されます。我が子のように育てた米ですから、おいしく感じるはずです。これも立派なアニミズムでしょう。

私の妻が食事をしながら「わが家でとれた食べものは、みんな物語があるよね」と言います。私も「そうだな」と応じます。みんな田畑で、私たちと一緒に、生きものだった時を過ごして、こうして、最後は私たちの身体の中に入っていくのですから。

しかし百姓でなくても、食べものを前にすると「これはどこで穫れたものかな」と思うことが多いでしょう。それは別に「産地表示」を求めているわけではありません。その食べものは生きものだったときに、どういう自然の中で、どういう自然のめぐみを受けて育ったのか、そして自身も自然のめぐみとして、この食卓に上がったいきさつを物語として伝えようとしている、とあなたが感じているからです。そう感じるからこそ、「きみはどこから来たの。どのように育ってきたの」とあなたは尋ねるのです。

食べものを食べることは、生きものを殺して、その命をもらうことです。その生きものと話をする最後のひとときが食卓なのです。ぜひ、そういう会話をしてほしいと思います。

残念ながら、工業製品にはこういう気持ちが湧きません。「この時計はどこで、だれがどういう気持ちで製造したのだろうか」と想像することすらなくなりました。まだ時計が職人の手でつくられていたときには、そういう感覚もあったでしょう。しかし大量に同じ製品が工場生産されるようになると、関心は性能と価格とデザインとブランドだけになりました。

じつは、食べものも同じような道をたどっているのです。品質と価格と安全性だけが表示され、評価されつつあります。「中身がよければ、どこでとれたものでもいいんです」と言われつつあります。生きものの生を「中身」とか、「品質・価格・安全性」などの性質で表現できるでしょうか。妻が言う「物語」とは、生きものが語る「物語」なのです。

これこそ、食べものアニミズムの豊かな世界です。

アニミズムが現代人にとっても、かけがえのない豊かな文化だと見直されてきた理由のひとつは「心の理論」が一九七〇年代に生まれたからです。あなたはなぜ、友だちの気持ちがわかるのですか。友だちの表情や言葉や行動や仕草から、読み取っているからでしょう。どうやら他の動物にはこうした能力はないことがわかってきました。みなさんの相手の心を読む能力は人間だけ

のもので。このように人類は進化してきました、と言われています。

ところがみなさんは、この相手の心を読み取る能力を動物や植物や、そして物にも使ってしまうのです。あなたが生きものを好きなのは、生きものの中に通い合うものを感じるからなのです。これこそ、アニミズムの正体なのではないでしょうか。約五万年前から、人類には死んだ人の墓に花を添そえる習慣が始まりました。「あの人が好きだった花を供えよう」という気持ちは現代でも続いています。こうしたアニミズムが生まれたからこそ、虫や草だけでなく、雲や雨や太陽や山や川にも心や意図を読み取るのです。「どうして、こんなに雨が降らないんだ。そろそろ降ってくれ」と本気で空を見上げて祈いのるのです。まるで空に意志があるかのように、相手にしているのです。

私たちが「物語」を生み出すのも、そして宗教までつくりあげて信仰しんこうするのも、こういう能力を備えてしまったからなのです。「擬人法」という表現の仕方は、決して昔の古い習慣などではなく、現代にいかす大切なものなのです。

⑥ この能力・感覚と習慣がなかったなら、日本人に限らず人間が自然を好きになったり、自然にひかれたりすることなどはなかったでしょう。これからもこの感覚と習慣をもっともっと大事にしていかなければならないと思います。

(宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』より)

問1 空らん **A** にあてはまる最もふさわしいことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | |
|-------|-------|-------|---------------------------|
| 1 精神性 | 2 多様性 | 3 論理性 | 4 偶然性 <small>ぐうぜん</small> |
|-------|-------|-------|---------------------------|

問2 空らん **B** にあてはまる最もふさわしいことばを文中より四字でぬき出しなさい。

問3 空らん **C** にあてはまる最もふさわしいことばを漢字一字で答えなさい。

問4 ——線①「すべてのものはアニマ(魂)を持っている、という考え方」とありますが、この考え方を何と言っていますか。文中より漢字五字でぬき出しなさい。

問5 ——線②「自然に対して、現代の主流である理知的な、科学的な見方」とありますが、この見方を強めていくとどうなっていくと筆者は言っていますか。文中より十六字でぬき出しなさい。

問10 本文の内容として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 現代の理知的な見方において、生の根源には、生を生まれさせ、支え、終わらせるいのちがあるとし、それは生の時も生を失った後も存在し続ける確かなものの力で貫かれているとしている。

2 稲の状態を科学的に観察、分析したりして知することは、人間だけに与えられた能力であり、そうした力を使って稲が何を求めているかを読み取るとは大切なことであるとしている。

3 自ら育て収穫した米とそうではない米とを食べ比べたとき、多くの生産者は自ら育てた米の方がおいしいとするが、目隠しをして食べると米に対する物語が消え味も変わるとしている。

4 食べものが食卓に上がってくるまでのいきさつに、あれこれ思いを巡らしてそれを感じとることは、かつて天地自然の諸々と話をしてきた時代の感覚・感性に通じることであるとしている。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「巧」

ならんで歩きながら、豪は何度かグラウンドに目をやった。

「おまえ、なんで入学してすぐ、野球部に入らんかったんじゃ？」

入学式から六日たっていた。式が終わってすぐ、入部届をくばってもらった。これに入部希望クラブ名、本人と保護者の氏名を記入し、捺印して学校に提出すれば、その日からクラブ活動に参加できるのだ。豪は、入学式から帰ってすぐに届を書いた。巧も当然、そうするものと思っていた。だから、その夜おそくかかってきた電話にはびつくりした。一瞬、息がつまったほどだ。

「入部届、

A

巧は、そう言った。一瞬つまった息をはきだしてから、豪は、なんでじゃと聞きかえした。

「なんでもいいだろ。ともかく明日、出したりするなよ」

「じゃ、

B

「いつまでに出せばいいんだっけ？」

新田東中の生徒は全員、なんらかのクラブに所属すること。ただし、一週間の猶予期間をあたえる。そのあいだにクラブを見学して決めること。一度決めたクラブは最低一学期間は続けること云々。『生徒の心得』という小冊子に書いてあったと思う。服装から、勉強のやりかた、休日のすごしかたまで細かい字でびっしり書いてあった。ばかばかしいと思いつつ、クラブ活動に関係あるところだけは読んだ。

受話器をにぎりなおして、豪は答えた。

「一週間は、出さんでええんとちがうか」

「じゃ、一週間待て」

「待つてどうするんじゃ」

なんのために一週間待つのかわからない。

「一週間待つて、そのあいだ、なにをするんじゃ」

「自主トレ」

それだけで、電話はきれた。

ツイン、ツインと電子音が耳に響く。

「なんなんじゃ、巧、どういうことなんじゃ」

きれた電話から答えがかえってくるわけもなかった。それでも声に出してたずねてしまった。

中学では、野球部に入ると決めていた。決めていたというもんじゃやない。野球をするために中学に行くぐらいの思いはあったはずだ。少なくとも豪は、巧とバッテリーを組んで野球をすることを目的にしていた。中学校の三年間だけじゃやない。それから先もずっとそのつもりだった。まだ十三歳にもなっていない。将来の自分の姿など、影も見えなかった。しかし、巧の球を受ける

こと、受け続けること。キャッチャーとしての自分の姿だけはたしかに見える。巧の球には、それだけの魅力があった。はじめて見たのは去年の夏。少年野球県大会の会場だった。豪のいた新田スターズは、二回戦で負けた。

「豪、次の試合に出るピッチャー見てみや。一回戦見たかぎりでは、ちよつとはんぱじゃないぞ」

帰り支度をしていたとき、監督から声をかけられた。正直、かんべんしてくださいよという気持ちだった。八月である。炎天下で二試合戦って、くたくたに疲れていた。帰りのバスが来るまで木かげでアイスクリームでもなめていたかった。それでも監督の言葉にしたがったのは、野球もこれで最後という思いがあったからだ。中学に入ったら勉強に重点をおくと母に約束していた。適当に楽しめるクラブに入って、勉強も適当にやって、それでいいと思っていた。

しかし、めつたに人をほめない監督が、ちよつとはんぱじゃないと真顔で言った。そう言われたピッチャーを見とくのも思い出になるかなと、なつとくした。

午後一時からの二回戦第二試合。真夏の熱と光に、めまいがするようなグラウンド。そこで、巧の球に出会った。マウンドにいる少年が同い年だとは信じられなかった。身体だけをくらべれば、自分のほうがはるかに大きい。縦縞のユニフォームを着たピッチャーは、華奢にさえ見えた。それなのに、あの球はなんなのだろう。バットにかすりもせず、ボールがキャッチャーのミットにおさまる。その音が聞こえるような気がした。

——あ、あのボール受けてみたい。

バッターとして打ちかえすのではなく、キャッチャーとして受けてみたい。身体の奥から思いがせりあがってくる。五、六球に一度、受けそこねて前にこぼすキャッチャーが、はがゆかった。自分ならあんなまねはしない。一球、一球に心を集中して、ていねいに球をつかまえる。自分なら、もつと……せりあがってきた感情が、心臓といっしょに激しく鼓動する。生まれてはじめての経験だった。

次の日の準々決勝も、準決勝も見た。一週間後の決勝戦もひとり見に行った。バスで二時間以上の道程も、八月の熱も気にならなかった。県大会だけではない。中国大会まで見に行った。広島まで、巧の球だけを見に行ったのだ。十月だった。

——あの球を受けてみたい。

秋の日差しの中で、また強烈にそう思った。思っても手立てがあるわけではない。あきらめるよりほかなかった。自分の中に芽生えた強烈な思いをすててしまう。自分がちよつぽけなつまらない人間だと感じてしまう。母がよく使う『せつない』^③という言葉の意味が、生々しい感覚としてせまつてきた。

広島から帰って、しばらく落ちこんでいた。だから、巧が、新田に越してくると聞いたとき、それがほんとうだと確かめたとき、本気で神様を信じようと思った。新田神社に行つて、五百円玉を二枚、賽銭箱に投げこんだ。おいしいなんて思いもしなかった。

巧の球を受けること、受け続けること。

巧に出会って、はじめてその球を自分のミットに捕らえたときから決めた。まず、中学に入って、本格的にバッテリーを組むのだ。だから、一日も早く野球部へ入部届を出して、練習したかった。巧が自分のことをどう考えているのかわからない。しかし、野球よりほかにやることなんてないはずだ。少なくともそのことだけはわかっていた。なのに、一週間待てと巧は言ったのだ。巧が言うから理由も聞かず待った。六日待った。

今日は土曜日。明後日の月曜日が入部届のタイムリミットだ。豪のいる四組でもほとんどの者が入部先を決めていた。新田スターズ[☆]の仲間だった東谷や沢口も、とつくに野球部に入り、今もグラウンドで走っている。豪は少しあせっていた。

「巧」

カバンをわきにかかえ、両手をポケットにつっこんだまま、巧は返事もしない。こういう態度には慣れっこになったから腹はたたない。

「ちゃんと教えてくれてもよからうが。なんで、わざわざ一週間ものばさんとあかんかったんじや」

巧の足がとまる。身体が九十度動いて、目尻^{めじり}のあがつたきつい目がまっすぐに豪に向かいあった。巧は、他人としゃべるとき、絶対に視線をそらさない。思わず相手が身をひくような目つきをする。その目にもだいたい慣れてきた。

⑤「自主トレだつて、言っただろう」

たしかに放課後、公園でふたり、トレーニングをやっていた。走りこみ、柔軟体操^{じゅうなん}、キャッチボール、ストレッチ。

「だつてな、自主トレなんてもんは、プロの選手がキャンプインに向けてするもんなんじやろ。おれらがそんなまねせんでも、早う入部届出したら、グラウンドでちゃんと練習できるがな」

豪は、グラウンドの方向に少しあごを動かした。動きにそうように、巧の目がひろいグラウンドに向く。

「そりやまあ、おまえがなにか考えて届を出さんかったんならええけど、ちよつと説明というか「不安だつたんだよ」

豪の言葉をひとことたち切つて、巧がまた歩きだす。

「は？ なんじやと、なんて言うた？」

「だから、ちよつと不安になつたんだよ」

ふあん、ファン、不安。今聞いた言葉の意味がよくわからない。

「おい、ちよつと、巧。待てよ、ふあんて、このふあんか？ 安心でないで意味の」

豪は、指で空中に不安という字を書いてみた。

「ほかに、どういう字があるんだ。ばかなこと聞くなよな」

不安。どこにでもごろごろ転がっている言葉だけど、巧が口にするなんて信じられなかった。

自分に対する絶対的な自信。うぬぼれでなく、ひとりよがりでなく、自分の中にあるものを信じきる力。そんなものを巧は持っていた。こいつでも、不安になったり、こわかったり、迷ったりするのかと、意外だった。

「うそじやろう」

思わず大きな声が出た。巧がふりむく。そばを通っていた何人かの女生徒もふりかえった。そして、きやはつという笑い声をあげる。

「ひとりで、なに大声出してんだ」

「だって、なんでおまえが不安になったりするんじゃない。そりゃ、新田の野球部は部員も多いし、練習わりにきついで聞いとるけどな。けど、おまえの実力だったら、そんな不安にならんでもえかるうが。おれ、おまえの言うとることがようわからん」

言いながら、^⑥巧の眉がかすかによつて、ほおが少し赤くなったのに気がついた。

(あ、怒おちらせたかな)

そう思ったとき、巧がポケットから手を出した。手首から先が動く。赤い小さなものが飛んできた。よけるひまはなかった。右肩みまかたに当たる。鈍にぶい痛みがした。はねて落ちようとする赤いものを右手で受けとめる。丸いミニキャンディーだった。目にしみるほど真つ赤な紙につつまれている。かたい。顔に当たっていたら、そうとう痛かっただろう。むろん、巧が、無防備の顔をねらうわけはなかった。そのくせ、顔の近く、けっこうドキッとさせられる場所を選んで、まっすぐに当ててきた。かなり怒っているのだ。

「巧、怒ってるんか」

「当たり前だ。なんで、そんなあほな勘かんちがいするんだ」

「勘ちがい？」

「おれが不安だと言ったのは、自分のことじゃなくてあちらさんのことだよ」

あちらさんというのが、野球部のことだとはわかった。わからないのはその先だ。豪は大またで巧に近づき、横にならんだ。待っていたように巧がひとつ、息をつく。

「グラウンドがずいぶんひろく見えるだろう」

「ああ、そうじやな。新田中のグラウンドはこころへんでもひろいほうじゃけん。けど、それがどうした？」

「だから、おれも入学してすぐ入部届、出すつもりだったんだけどな。練習してるの見たら、やたらグラウンドがひろく見えるだろ。それでちょっと不安になってさ。だから、どういうふうに言えばいいかなあ」

巧がだまりこむ。自分に説明する言葉を一生懸命けんめいさがしていると感じたから、豪もだまって待つことにした。

「うん、ようするにグラウンドもひろい。ひろいけど、めいっばい動けばひろすぎるってほどじゃないだろ。今もそうだけど、グラウンドがひろいっていうよりがらんとして見えたのは、練習

してるやつらの動きが、鈍くて、ちんたらしてたからなんだ。春なんて、すっかり基礎体力つけとなくちゃいけない時期なんだぜ。でなきや、夏の試合なんてもたないもんな。そういうの、ちよつと不安だろうが」

つまり、野球部の練習に不安があるから、この一週間近く自分たちなりのトレーニングをやってきた。巧はそう言うのだ。

「わかったか」

「よく、わかった」

「ならいいけど。今度から、いちいち説明なんかさせるな。かったるくてしょうがないだろ。それと、月曜日には入部届、忘れんなよ」

「月曜日に出すんじゃない」

「しょうがないだろ。いつまでも、ふたりでやつてるわけにいかないし、あつたかくなつたから、グラウンドの連中も少しはましな動きになったんじゃないの」

こんな会話、野球部のメンバーに聞かれたら、おおごとじゃな。なんとなくおかしくなる。

「なに、にやついてるんだよ」

「いやいや、べつに。じゃあ今日も昼飯食ったら、公園に行くわな」

「当然」

豪はキャンディーを口に入れた。ソーダの味がした。

「まだ、あるぞ」

今度は黄色いキャンディーのつつみがわたされる。

「おほつ、こんなん、いつつも持つてきとるんか」

「おれ、糖尿病だからな、甘い物があるんだ」

キャンディーが、のどの奥に転がり落ちそうになる。

「糖尿病つて、そんな、うそじゃろ」

「うそだよ」

にやりともしないでそう言うと、巧は足早に歩きだした。

⑦ 速球に目の慣れた打者に対し、タイミングをはずすスローボールを投げるように、巧は時々、こんな冗談を言う。

ソーダ味のつばをのみこんでから、豪は、つまんねえ冗談とつぶやいてみた。

(あさのあつこ『バッテリーⅡ』より)

問1 空らん

A

・

B

 にあてはまる最もふさわしいものをそれぞれ次から一つずつ選
び、番号で答えなさい。

- 1 いつだすんじゃないか？
- 2 もうだしたか？
- 3 ださないのであるか？
- 4 出すのをやめるよ
- 5 出さんでええんか
- 6 出すのを待てよな

問2 次の一文はもと本文中にあったものですが、どこに入れるのがふさわしいですか。
あてはまる部分の直前の五字を答えなさい。

巧はたぶん開きもせずですてたのだろう。

問3 ——線①「ちょっとはんばじゃないぞ」という監督のこぼれを聞いた豪についての説明と
して最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分はほめられたことなどないので、ひそかな対抗心たいこうしんからそのピッチャーの実力を確か
めてやりたくなった。
- 2 野球をあきらめなければならぬ自分と相手を比べることで、せんぼう羨望や嫉妬しつとの対象として
強く興味をひかれた。
- 3 くだくだに疲れているにもかかわらず、自らの選択せんたくを変えることにもつながる才能を見
てみたいと感じた。
- 4 最後に記念的な意味で、監督のいうピッチャーを見ておくのも悪くはないだろうとい
うぐらいに思った。

問4 ——線②「はがゆかった」とありますが、この「はがゆい」と同じような意味のことばと
して最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いらだたしい
- 2 わずらわしい
- 3 まぎらわしい
- 4 ふてぶてしい

問5 —— 線③ 「『せつない』という言葉の意味が、生々しい感覚としてせまってきた」とありますが、このときの豪がせつなくなっているのはどうしてですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の希望を言っても母親が許してはくれそうにないから。
- 2 自分と巧とでは才能に大きな差があると感じてしまうから。
- 3 自分の気持ちを巧にうまく伝えられないと思っっているから。
- 4 自分の願いなどどうやってもかないそうにないと思うから。

問6 —— 線④ 「五百円玉を二枚、賽銭箱に投げこんだ」とありますが、ここで豪はどのようなことを願ったと考えられますか。次の空らん I ・ II に入ることをばを、それぞれ文中より八字～十二字でぬき出しなさい。

I とわかったので、 II ことができるよう願った。

問7 —— 線⑤ 「自主トレだって、言っただろう」とありますが、巧が自主トレをしようとしたのはどのような思いからですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 きつい練習に負けないだけの体力をつけ、入部後は自分や豪が一年の中心になってやろうという思い。
- 2 今のままでは練習についていけるか自信がなかったので、ひそかに体力をつけておきたいという思い。
- 3 部の練習ぶりにばくぜん不安を感じ、自分や豪だけはもっと厳しい練習をしておきたいという思い。
- 4 だれにも負けない体力をつけて、顧問や上級生たちから一目おかれる存在になってやろうという思い。

問8 —— 線⑥ 「巧の眉がかすかによって、ほおが少し赤くなった」とありますが、このときの巧の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 豪にからかわれてしまったので、ひどく焦っている。
- 2 豪の態度が投げやりなので、少し怒りを感じている。
- 3 豪に痛いところをつかれたので、やや動揺している。
- 4 豪が真意を理解してくれないので、いらだっている。

問9 — 線⑦「速球に目の慣れた打者に対し、タイミングをはずすスローボールを投げるように」とありますが、これは巧のどのような言い方をたとえた表現ですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 相手をばかにするように上からものを言うこと。
- 2 人をくったような思いがけない発言をすること。
- 3 相手の思いに配慮せず思いつきで発言すること。
- 4 自分の考えを相手に悟られまいとごまかすこと。

問10 本文では巧は自信家で気の強い人物として描かれています。それは、他人に対するどのような態度にあらわれていますか。文中より最もふさわしい二十五字の一文をぬき出し、はじめの四字を答えなさい。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問題を作成するにあたり、表記を改めたところがあります。

したり止まぬ日のひかり

うつつまはる水ぐるま

あをぞらに

越後の山も見ゆるぞ

さびしいぞ

一日の言はず

野にいでてあゆめば

菜種のはなは

遠きかなたに波をつくりて

いまははや

しんにさびしいぞ

(室生犀星『抒情小曲集』より)

問1 この詩はもともと二連構成の詩です。第二連はどこから始まりますか。はじめの三字をぬき出さなさい。

問2 この詩はいつの季節をよんだものですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 春 2 夏 3 秋 4 冬

問3 ——線「うつつまはる水ぐるま」とありますが、この「水ぐるま」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 激しく音を立ててもものすごい速さで回っている。
- 2 水の中ではしゃぐ子どもたちの力によって回っている。
- 3 今にも止まりそうになりながらぎこちなく回っている。
- 4 止まることなくゆっくりとしたリズムで回っている。

問4 この詩の表現の特徴として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 表現技法をまったく使わないことで心情を直接的に述べている。
- 2 定型詩ではないが部分的には一定のリズムを意識してよんでいる。
- 3 はつきりとは感情を述べずに情景から心情を描き出している。
- 4 一行ごとに文を切ることで説明的にならないように工夫している。

問5 この詩では主題としてどのようなことが描かれていますか。最もふさわしいものを次から

一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 のどかな自然の景色と対比して描かれる作者の際立つ孤独。
- 2 自然の雄大さの中で寂しくも一人で生きる作者のたくましさ。
- 3 自然の静寂さと力強さが調和して生まれる作者の感動。
- 4 楽しい日々と寂しい日々が繰り返されることへの作者のむなしさ。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 我々はクマのセイタイをもっと知るべきだろう。
- 2 日本人選手のMVP受賞はカイキョだ。
- 3 少子化が経済にシンコクな影響を与え始めている。
- 4 日常のいそがしさから早くカイホウされたい。
- 5 コロナ後も感染かんせんの防止にツトめなければならぬ。

問2 次のA～Eには上下左右と組み合わせて漢字を作ることができます。共通の部首が入ります。

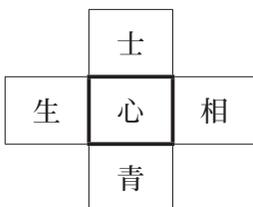
その部首の説明として最もふさわしいものを後の1～10からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

(注1) 同じ番号をくり返し使うことはありません。

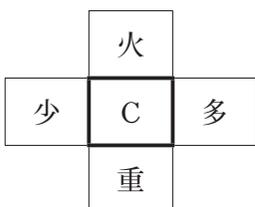
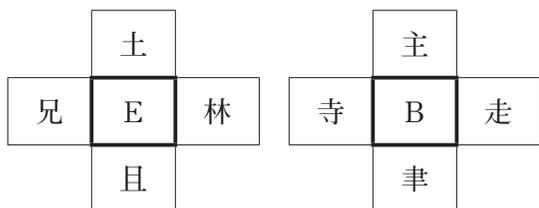
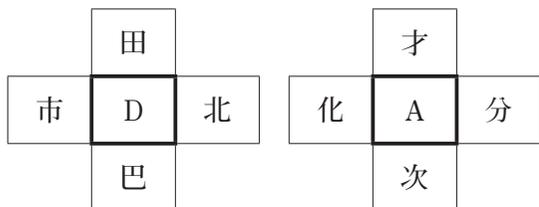
(注2) 組み合わせて成り立つ漢字はすべて小学校までに習う字です。

(注3) 同じ意味を表す部首は形が異なっても同じと見なします。

【例】



【答え】 0 できる漢字 志・想・情・性



- 0 気持ちや心の動きなどに関するもの。
- 1 建物やその中、その付属物などに関するもの。
- 2 神や神がもたらす幸い・災いわざわいなどに関するもの。
- 3 道や町などに関するもの。
- 4 水やその状態などに関するもの。
- 5 お金やそれにかかわる行い・状態などに関するもの。
- 6 衣服やその状態・動作などに関するもの。
- 7 米や麦などの実りなどに関するもの。
- 8 草や草で作るものなどに関するもの。
- 9 身体の各部やその状態などに関するもの。
- 10 女性や親族などに関するもの。

